
博士学位論文『平安朝における中晩唐詩賦の舶来と享受』

要 約

序論「東アジアのなかの中晩唐詩賦」はまず、研究の学術的背景となる西嶋定生「東アジア世界」論および古典文学研究者たちによって提唱された「東アジア漢文文化圏」の理念を紹介する。漢文文化圏の成立に先立ち、古代東アジアにおける中国古典文学の流伝、享受の実態を解明するために、中晩唐詩および律賦の佳句を収録する『千載佳句』『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』の三種の平安朝詞華集を研究対象とし、先行研究を整理する。続いて本論文の内容および独創性を紹介する。

第一章「中晩唐詩の舶来と佳句集の編纂」では、中晩唐期の詩集が舶来した状況を考察して、『千載佳句』『和漢朗詠集』の編纂に用いられた可能性のある書物を推測する。

本章はまず唐人詩集には巻帙の少なく、書写しやすい「小集」が流伝したという先行研究の指摘に基づき、白居易による十巻本の小集『白氏洛中集』および劉禹錫・白居易の二人の唱和詩集『劉白唱和集』が日本に舶来して、平安朝の貴族文人に愛読された状況を考察する。『千載佳句』編者の大江維時が『白氏洛中集』を朱雀天皇に進講したり、両書より多くの佳句を採録したりしたことは、これら「小集」が『千載佳句』の編纂資料となった可能性を示唆する。また、『和漢朗詠集』が『白氏洛中集』の序である「序洛詩」、跋である「香山寺白氏洛中集記」よりそれぞれ一句を採録したのは、『白氏洛中集』という書物が『白氏文集』とは別に享受されたことを語っている。

また、『酉陽雜俎』の逸話に見える元稹・白居易の佳句が『千載佳句』に収録されること、『詩人主客図』所収詩人が『千載佳句』作者と多く重複することを根拠にして、特に『詩人主客図』のような中晩唐期に成立した佳句集が日本に伝わり、『千載佳句』編纂資料となった可能性を指摘する。晩唐の名臣・王起が科挙試験のために編纂した『文場秀句』という佳句集には律詩・律賦の佳句を合わせて収録した可能性が高く、それが『和漢朗詠集』の漢詩文佳句を合わせて収録するスタイルに影響を及ぼしたと思われる。

そして、『和漢朗詠集』に収録される一句の元稹佚詩に注目して、出处として注記される「宮詞」は元稹が言及した、江南地方で流布した偽作の「宮詞百篇」にあたる可能性を指摘する。中晩唐期には元白二人の偽作が横行したことは、白居易の文章にも記される。最後に、大江匡房「詩境記」に見られる晩唐詩人や『通憲入道蔵書目録』に著録される晩唐詩集を列挙して、『千載佳句』の晩唐詩句収録状況と対比する。『千載佳句』および「詩境記」にその名がなく、『通憲入道蔵書目録』に詩集が著録される李商隱について、その詩集の舶来は北宋初期における西昆体の流行と三卷本詩集の編纂に関連すると論じる。

第二章「遣唐使と唐代の公主和親— 積弁正「与朝主人」・菅原清公「奉和王昭君」詩考—」は、積弁正・菅原清公の二人の漢詩制作を「遣唐使の文学」というカテゴリーで捉え直し、唐代の公主和親に関連する詩作を考察するものである。

奈良朝および平安朝前期に十数回行われた遣唐使の派遣において、遣唐使の人々は日唐間の交流において重要な役割を担った。遣唐使による漢詩制作は、彼らが見聞した唐土の政治情勢や社会現実、または思想および文化の風潮を反映していると思われる。そのため、本章は「公主和親」という唐一代を通して多く実施された、近隣の異民族・異国を懐柔するために皇帝あるいは宗室の娘を降嫁する政策を手がかりにする。

唐代では公主和親を題材とする、あるいはこれに言及する詩文が多く作られた。大宝二年（七〇二、唐の長安二年）に入唐した積弁正は唐土に長らく居留して、後に即位して玄宗となる李隆基の恩寵を受けたほど、異国の人でありながら唐の宮廷と関係があった。初唐期の公主和親は皇帝による恩寵的性格を持っており、国威発揚、異族教化の観点から賛美されたため、彼が公主和親を礼讃する「与朝主人」（『懷風藻』所収）を作って中宗に献上したのも、そうした状況を反映する。

その後、安史の乱を経て唐の国力が衰退するにつれ、公主和親は異民族を懐柔、籠絡するための苦肉の策となっけ、戎昱「詠史」詩をはじめ、和親を批判する声があがった。延暦二三年（八〇四、唐の貞元二十年）に入唐した菅原清公は、和親批判の世論に触れ、また同時代の文学としての唐の文学を体

感した。帰国後、嵯峨朝の宮廷で作った「奉和王昭君」（『文華秀麗集』所収）は、冒頭の二句が大臣の無能を諷刺したものである。

唐代では公主和親が度々行われたため、文人たちは前代の和親した女性、なにかんづく説話が広く流伝して『世説新語』『西京雜記』といった筆記小説にも取り上げられ、六朝の樂府詩の題材ともなった王昭君に注目した。王昭君は元帝の後宮の出自であったが、唐詩では「和親公主」として言及されることが多い。また、王昭君を題材とする変文や絵画など、様々な文芸が盛んに発展した。弁正が王昭君の典故を用いて金城公主の和親を詠い、また菅原清公が王昭君の悲運を詠うのは、この風潮の影響を受けたと考えられる。

第三章「『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』所収「曉賦」佚句考—東アジアに流伝した晚唐律賦—」は、両朗詠集所収「曉賦」より採録したと注記される律賦佳句を考察するものである。

御物粘葉本『和漢朗詠集』の五つの佳句は、その出処はいずれも「曉賦」と記されるが、『和漢朗詠集』諸古写本・古筆切・古注釈を整理すると、うち一句が賈嵩の作であることは確定できるものの、残りの四句の作者が謝觀なのか張誦なのか定められない。また、穂久邇文庫本『新撰朗詠集』は「曉賦」佳句として二句を収録しており、諸写本・刊本は作者を謝觀と記す。「曉賦」本文の実態、すなわち『和漢朗詠集』所収のものと『新撰朗詠集』所収のものがはたして同じ作品の句か否かもはっきりせず、両朗詠集研究および唐代律賦研究において懸案の一つとなっている。

一方、朝鮮近代の崔国述という人が新羅末期の文人・崔致遠の詩文を輯佚して、『孤雲先生文集』を刊行した。その巻一に収められる「詠曉」と題する律賦は注目すべきである。「曉賦」より採録したと注記される『和漢朗詠集』の四つの佳句、『新撰朗詠集』の二つの佳句は、この「詠曉賦」の句とは文字の異同があるけれども、それぞれ極めて近似しており、同じ作品であると考えられる。中国南宋期の陳元龍が北宋の文人・周邦彦（字は美成）の詞集に注を施した『詳注周美成詞片玉集』には、「吳融詠曉賦」の佚句が四ヶ所引用されており、これもまた崔致遠の作とされる「詠曉賦」の句とほとんどが一致している。そのほか、朝鮮王朝初期の成俔が「唐吳融詠曉賦」に言及しており、彼が

目にしたのは『詳註周美成詞片玉集』と同一の「吳融詠曉賦」であれば、この記述は「詠曉賦」が朝鮮半島で吳融の作として流伝した痕跡の一つと見なせる。

「曉賦」（あるいは「詠曉賦」）の作者に関する文献に見られる張誥・吳融・崔致遠・謝觀の四つの説を検証すると、四人はいずれも律賦制作に優れた文人であるが、謝觀を「曉賦」佳句の作者と記す積信阿『和漢朗詠集私注』は諸文献の中最も早く成立したものであること、また『和漢朗詠集』所収「曉賦」諸句とは同じ律賦を出処とする『新撰朗詠集』の二句の作者が謝觀であると記されることから見れば、決定的な文献資料が発見されない限り断言するのは難しいが、やはり謝觀が「曉賦」の作者である可能性が最も高い。国を跨いだ漢文学交流の風潮の中、崔致遠が謝觀の賦を書写して新羅に持ち帰り、のちに朝鮮半島では崔致遠本人の作とされてしまった可能性が高いと推測できる。

第四章「中晩唐律賦の舶来と享受—『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』所収佳句を中心に—」は、両朗詠集所収すべての晩唐律賦佳句を対象として考察するものである。

本章はまず唐代の詩文総集・筆記小説・出土墓誌を利用して両朗詠集所収律賦佳句の作者について考察し、彼らの律賦創作の状況を明らかにする。白居易はもちろん、公乘億・賈嵩・張誥・謝觀の四人いずれも中晩唐期に活躍した、律賦制作に優れた文人である。また、『和漢朗詠集』444番の句を再考し、この句が実は中唐の文人・皇甫湜の作であると明らかにする。

唐代の進士科試験で出題された律賦は、佳作がよく抄写されて単篇で流伝し、流伝のスピードもかなり速いようである。中晩唐期では、専ら賦だけを収録する文人の賦集も編纂されるようになり、『崇文総目』や『新唐書』芸文志では賦集が多く著録され、公乘億・賈嵩・謝觀の賦集も含まれる。一方、実在の事物や感覚・感情を題材にし、典故を盛り込んで文才を誇示する作品も現れた。

佳句が両朗詠集に収録される中晩唐律賦は、十世紀前半期にすでに日本に舶来した痕跡が『本朝文粹』所収詩序より確認される。『枕草子』一九七段「文は」は中国・日本の優れた漢文作品を列挙し、三卷本本文には「新賦」の語が見られる。中唐に成立して日本にも伝わった律賦制作指南書『賦譜』では「新体」「新賦」の語がともに律賦を指すため、清少納言の言う「新賦」も律賦を指す可能性が高い。ほかにも『通憲入道蔵書目録』に著録される「新賦略抄—

卷」や、「朗詠江注」系統の書入れを持つ貞和本『和漢朗詠集』にある「新賦」を利用する校勘注記など、律賦のみを収録する書物の舶来を仄めかす資料がある。

平安朝貴族社会において、これら律賦佳句は「朗詠」の形で享受された。『枕草子』は藤原伊周をはじめとする貴族たちが賈嵩・公乘億・謝観の佳句を朗詠した様子を記録している。中晩唐律賦が貴族社会に浸透し、律賦佳句の典故・表現が人々に共有されていたことが知られる。さらに、中晩唐律賦の流行にとともに、古典籍である『文選』は一時軽視されたようである。『和漢朗詠集』が多く律賦佳句を収録する一方、『文選』よりわずか二句の佳句を収録するに過ぎない。平安朝後半期に至って、『文選』は再び重視されるようになり、『新撰朗詠集』が『文選』より十五句を採録したことは、平安朝後期における『文選』享受の実態を物語る。また、中晩唐律賦の句法の一つである「重隔句」や律賦佳句の表現が平安朝漢文学に受容される事例を挙げて考察する。

第五章「書屏風の盛行と流伝—唐人詩文の^{メディア}媒体として—」は、「屏風」という空間を区切る装飾物の詩文流伝の媒体として機能する一面に焦点を当てて考察するものである。

屏風に関する記述は『礼記』まで遡る。両漢の宮廷において美人図が描かれた屏風の存在は『漢書』『東觀漢記』より確認できる。六朝時代に芽生えた書屏風は、陶弘景・庾元威・蕭子雲・蕭放など、蕭梁皇室およびその周辺の人々がその制作に関わったことが多い。

唐に至って、褚遂良・徐浩・懷素ら書の名手の揮毫による書屏風が盛んに制作された。一方、唐の書屏風にはほかに教訓的文章・善言を書き付ける、座右の銘に類似する教戒機能を果たすものもある。太宗およびその大臣の虞世南・房玄齡の事例があり、下って憲宗は歴代の明君賢臣の事跡を用いて書屏風を制作することを命じ、それに倣って世を治める決意を示す。民間では詩僧の王梵志・寒山の詩にも、人に対して屏風に書かれる教訓を読むように勧める句がある。

中晩唐期では、詩文を屏風に書き付けて意図的に伝播させる風潮が現れた。白居易は元稹より贈られた詩を常にそばに置いて吟味できるように、屏風に書き付けたことがあり、またその詩が人々に多く抄写されて広く伝わることを期

待していた。元稹・劉禹錫にも詩作が屏風に書き付けることに言及する句がある。屏風に書かれた詩はさらに抄写されて流伝したため、多くの異文が生じるのは想像できる。『唐摭言』の逸話に記される、李商隱が令狐綯宅の堂屋にある屏風に書写した「九日」詩はまさにその一例である。類似する事例には、詩障子が多く作られ、敦煌文献に多くの異文を持つ数々の写本が発見された韋莊の「秦婦吟」詩がある。

唐人詩文を屏風に書き付ける風習は、西域や日本・新羅・渤海など周辺諸国に広く伝わった。日本では、『白氏文集』を代表とする唐人詩文が書屏風の素材となった一方、島田忠臣・菅原道真など平安朝屈指の文人の詩文作品も屏風に書き付けられたことがある。下って藤原行成の書屏風制作には、「唱和集屏風」というおそらく『劉白唱和集』を書写したものがあり、「倭漢四尺屏風」のような「倭漢朗詠集」の名を想起させるものも存在する。大陸より舶来した屏風書の風潮を、屏風歌などの和的様式に合わせて発展させた流れのなか、『和漢朗詠集』編纂の原点とされる「和漢抄屏風」が現れたのである。

附論「『源氏物語』漢籍典拠小考―「まことの聖にはしけれ」と「白虹日貫けり」―」は、物語の漢籍引用の二例「まことの聖にはしけれ」と「白虹日貫けり」を取り上げ、その典拠について改めて検討するものである。

近代以降における『源氏物語』の漢籍引用に関する研究は、『白氏文集』以外の漢籍引用に対して最古の漢籍を典拠とする傾向が強い。ただ、作者である紫式部は実際如何なる漢籍を手に取り、物語の中で漢籍から文句を引用したかについて、考察不十分な点が多く残っている。

濡標巻に致仕の身の左大臣が側近の人々に勧められ再び出仕する一節があり、「まことの聖にはしけれ」の語は従来『史記』「留侯世家」の「四皓」の故事に基づくとされるのに対し、「四皓」を「まことの聖」とまで高く評価するのは、『史記』より白居易の「答四皓廟」の方から大きく影響を受けたと考えられる。それまで隠者のイメージが強かった「四皓」に対し、「答四皓廟」はその出处進退の選択を賞賛し、治世になると出仕するのは孔子のような「聖人」に近いと評している。特に『白氏文集』を熟読した式部は、「四皓」を理想的な人物像と描いた白居易の価値観を受け継いだのも自然なことである。

賢木巻に登場する頭弁の朗詠「白虹日貫けり、太子畏ぢたり」典拠が『史

記』『漢書』『文選』のいずれかに関しては定説がない。『日本国見在書目録』に記録された「史漢」と『文選』の書物の状況、『源氏物語』本文における『文選』の引用状況、朗詠する頭弁の立場および藤原道長の『文選』に対する好み等の要素を総合して考えれば、やはりこの句は『文選』から引用した可能性が高い。式部は『文選』を通読して、「白虹日を貫けり」の一句を引用したと考える方がより事実に近いように思われる。

結論は本論文の研究成果と意義を改めて整理し、今後の研究課題について述べる。